
H.B.

天海雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H . B .

【Zコード】

N6437M

【作者名】

天海雨月

【あらすじ】

一応主人公扱いの吉田茂は今日も元気に高校に通っていました。しかし、海外の転校生が一時体験してから少しずつ彼の環境が変わつていく話です。どうかよろしくお願ひします。チートはありません、異世界物語でもありませんが、SFである」とは認めます。

プロローグ（前書き）

どうも新人です。天海雨月といいます。ま、気が向いたら見て下さい。

プロローグ

この物語を語る前に、一つ読者に伝えないといけない。そうでないところの文章読んでいて、「なんかわかんない」とか「何これ」とか疑問に思つてしまつことだらけになつてしまつからだ。

まず、一つ目はこの世界には一つの財団がある。表派闘と裏派闘である。どちらも簡単に言い換えれば「表世界」と「裏世界」という。表世界には三つの財団が存在する。石原財闘、石倉財闘、石井財闘である。

石原財闘は工専門、石倉財闘は文化専門、そして石井財闘は戦闘機及び軍関係である。石井財闘は自衛隊の武器を作つていて、死の商人ではない。この三財闘が日本の表社会を支えている。どちらかが一方傾けば日本は崩壊するといわれている。

その下にも財闘があるが、この三財闘が鍵を握つていて、そこまでは重要ではないだらう。この三財闘を表社会に住む人々はこう呼ぶ「表世界秩序護衛三財闘」略して「表三財闘」と。世界各国で有名であり、彼らを襲撃したら家族全員が今後の人生は奴隸扱いを受けてしまつのだ。

裏世界にもそういう財闘がある。最もそれらは、一家ではあるが、同じように表三財闘と同じような名前がある。「裏世界秩序攻撃十八家」略して「裏十八家」。彼らに敵対するものは一族郎党抹殺と言われている。それぞれが謎の武術を使い、日本を裏側から守ってきたのである。名前は明るみでていよいのは、秘密だからである。

そして、一つ目はこの一つの表と裏世界を支配する財闘がある。その財闘は決して口にしてはならず、裏世界ではタブーとされた。

日本を支配しているのは政府ではなく、その家族が支配しているのである。この財団は「大久保家」と呼ばれているのである。闇から生まれた家族は闇の中でしか生きていけない、その鉄則を破つた一代目は追放となる。そして、三代目こそがこの物語の鍵を握る存在であるのだ。

プロローグ（後書き）

プロローグでした。基本的に二回に一度書くか、その時の気分次第で書きます。女性キャラクターは基本全員、ヒロイン扱いなのでよろしくお願いします。

べだらなことば (複数形)

はい、一話田です。高校の頃、いろんなことばを週りましたかつたです。みんなさんに楽しんで貰えたらいいと願っています。

ぐだらない日常

キーングーラン、カーノゴーン

始まりのベルがなり、今日もぐだらない授業が始まる。総連第一高校はマンモス高校ではないが、それでも生徒の数が多い。東京都のお茶の水辺りにある雰囲気はいくつ普通であるが、実際は都内屈指の問題学校である。生徒が暴力を振るつたり、体罰が絶えないとかそういうものではない、彼らの地域には警察がいない、マスコミが殺到しない実に穏やかな場所もある。

そう、お茶の水から池袋までは石原財団の縄張りなのである。だからといって、犯罪が起こらないわけでもない。だが、事件の次に日にはその犯罪者は撃ち殺されて発見されているのだ。

石原家の縄張りとはもう一つ違つ意味で怖い場所がある。それはのんばあの家といわれるマンション（？）のようなものがある。

そこに入れるものは人生に訳ありのある輩のみで、関係ない人々は例え赤ん坊でも、某国の大統領でも、動物でも、アイドルでも射殺される。警告が一度だけされ、それを無視するなら殺されてしまうのだ。

そう総連第一高校は石原家とのんばあの家に守られているのである。

「よし、みんな席に着いてもらおう」

リーダーらしき生徒が教壇に立つて、生徒を見回す。顔は童顔、背は168センチぐらい、黒髪はムースで整えている。この生徒をどうやらみんな慕つてこるように思える。

「先生が来る前にさつさと委員長を決めよ！」

「いや、お前やれよ」

一人の生徒がツツ「む。他の生徒もブーブーと文句を言いだす。

「何言つてんだよ。俺は企画員だ。委員長みたいな面倒臭い」と、神が土下座してもやらねえよ」

「じゃあ、誰がやるんだよ」

「ここは一つ、俺が推薦しようと思つ。平寺でよくねえか」

すると、窓際にいる生徒が一人びくつとした。彼は自分のことだと分かり、少しだけ嫌な顔をする。

「平寺か、いいな。よし、平寺に決定」

みんな頷きながら、一人の生徒に押し付けた。リーダーらしき人物が窓際に生徒に確認を促した。

「おい、隠田。賛成だよな」

「うん、わかつたよ」

震えながら、その少年を見た。彼はこれでこのクラスのイジメの標的にされたんだと理解した。

「それじゃ、平寺に決定」

ガラつとドアが開き、眼鏡を掛けたボサボサ頭の先生らしき人物が入ってきた。その先生はリーダーらしき生徒を見て、言った。

「何してんだ、吉田。そんなとこ突つ立つてよ」

「委員長を決めていました」

「そつか、それで誰になつたんだ」

「平寺です」

「隠田の了解とつたのか」

「はい」

「そつなか、隠田」

「ええつと、はい、一応」

「そつか、じやあ、みんなは隠田のことをよく聞くんだぞ」

すると、吉田と呼ばれた生徒は先生を見ながら笑い出した。

「どうした、吉田。お前頭可笑しなつたか」

「いや、先生。そつちの平寺じゃないですよ」

「ん? どうちの平寺なんだ・・・つてちょっと待てこひ。まさか、俺じやないだらうな」

「名前がひらじと読むのは先生しかいないでしょ。平次先生」

平次先生はもつていた回覧板のような本を下に落として驚いている。

「なんで俺が委員長しなきやいけねえんだよ」

「だつて、校則に先生がなつちやいけないなんて、決まつてないし。なあ、みんな」

他の生徒は笑いながら拍手をした。

「いや、俺は反対だ。断固反対だ」

「いや、先生。多数決で決まつたのでよろしく」

「てめえ、企画員じやなくて、学校のブラックリスト入りするぞ」

「もつ入つてゐると思いまーす」

睨み合ひ一人と他の生徒が笑いながら、授業が潰れたことに感謝している。

「てめえ、吉田。お前は2年B組の悪魔だ。おい、誰かエクソシスト呼んでこい」

「先生、さつき隣りのクラス行つたら、エクソシストどこか、地蔵もいませんでしたよ」

「何、みんな消えたのか。職員室にいたときはたしかにいたんだぞ」「え、それじゃ、怪奇現象で俺たち全員死んで、異世界に行つたとか」

「あわてんな、あわてんなお前ら」

そつ言いながら、窓から飛び降りようとする。生徒たちは必死に先生を押さえる。

「おい、ここ3階だぞ。落ちたら死ぬつて」「放せ、俺はこんなところで死にたくない」

繰り返します至急校長室に来て下さい。
キーンゴーン、カーンゴーン
「えー、2年B組の平次先生、平次先生。至急校長室に来て下さい。

「・・・・・」

「あ、そつこえば今日、一限田のホームルーム終わつてから体育館集合だつた」

そしてこの日を境に少しづつではあるが、吉田と隱田の様子が変わつていった。

ぐだらない日常（後書き）

どうでしたか。ちなみに、平次先生のあだ名はボサボーサ、教頭はザ・シャドーマスター、校長は理事長の配下、理事長は学園の悪の支配者です。何故こういった名前になつたのかは本編で話そつと思います。

次回は『謎の転校生』か『謎の転校生襲来』にしたいと思います。

謎の体験入学生（前書き）

ここから超人やら悪の組織やらが参戦する話です。

謎の体験入学生

「ちょっと平次先生、君、何故体育館に来なかつた。今日朝礼があると今朝職員室で言つたよね」

「うつせえ、理事長の配下が（ボソ）」

「なんか言つたかね」

縮地でも使つたのか、さつきまで外を覗いていた校長が平次先生の目の前にいる。太つていて、禿げていて、全ての校長の駄目な部分を受け継いだ究極の校長だつた。

生徒たちの間では「ハゲ」、「デブ」、「能無し」、「酢昆布より薄い髪の毛」など様々な名前で呼ばれていたが、2年B組が二つ名なんて付けたら他の教員が可哀想ということで普通の「理事長の配下」になつた。その横に学園最強の教師が黙つて状況を見ていた。彼の名前は明かされていないが、影が薄く、いつの間にか出現するため、二つ名が「ザ・シャドーマスター」になつてゐる。いいのか、わるいのかさっぱりわからない。

「いいかね、今日体験入学生が入つてくるから朝礼で挨拶しようとしたら、なんかぽつかり空間があつたのよ。で、よく見たら2年B組いないじゃん。ちょっと焦つたからね。体験入学生なんて『校長先生、あそこのクラスだけは不良が多いのですか。ちょっと不安です』とか言われて、理事長の耳に入つたらやばいなと思ったのよ。わかる？」

「そうですね」

「なんか適當だな。これからもう一度朝礼したら生徒たちが暴動起こすかもしれないから、今回来た体験入学生を君とこのクラスに特別に一人ずつ紹介するから、くれぐれも刺激しないように」

「そうですね」

「適當だな。それから体験入学生は三週間しかいないから、あまり

いじめないよ」

「そうですね」

「・・・」

「そうですね」

「何も言つてないし」

「そうですね」

「なんか腹立つてきたな」

「そうですね」

「てめえ、『失神してもいいかも』のオーディエンスじゃないんだから、このボサボーサめ」

「ちょつ、何であんたみたいなやつに俺の一いつ名呼ばれなきや、ならないんだ」

「うつせえ、お前なんてな」

争いながら校長がプロレスみたいにボサボーサの頭をくしゃくしゃにした。負け時とボサボーサが理事長の配下の腹を殴りつける。普通の学校には絶対ない光景だ。

そして、校長が体験入学生の中にいた。五人の留学生が教壇の前に立っていた。右から赤、黄、青、黒、白だった。最後の二人は国籍がなんとなくわかつたが、前の三人は国籍が全くわからなかつた。一人だけ男で後は二ユーハーフなのか、女なのか、年増なのかわからなかつた。

「いいか、お前ら、失礼な質問なしだからな」

「ういーす」

「お前ら、校長に向ける態度じやないよな」

「ういーす」

「まあいい。ほれ、自己紹介しなさい。みんな静かに聞いてろよ」

「ういーす」

「この教師、この生徒だな。なんか舐められてるみたいだ」

「ういーす」

「・・・」

校長は辺りを睨みつけて、体験入学生に自己紹介を促した。

「私の名前はリリー・A・リフナーです。パリから来ました留学生です。日本語は向こうで一生懸命勉強しました。3年C組でお世話になります。つまりあなたたちの先輩です。てへ？」

「ういーす」

「私の名前はジョージーナ・トンプソンです。アメリカから来ました留学生です。日本語は向こうで独学で習いました。1年D組でお世話になります。つまりあなたたちの後輩です。よろしく」

「ういーす」

「私の名前はクリスティ・ジョンクレイです。イギリスから来ました。日本語は母が日本人なため上手です。2年A組でお世話になります。つまりあなたたちの同級生です。よろしくね？」

「ういーす」

「俺の名前はジョン・アクゼルだ。アメリカから來た。三週間後アメリカアマのボクシング大会がある。そのボクシングをするために日本では環境がいいと聞いて來た。こここのクラスだよろしくな！」

「おうつっ」

「私の名前はニルイ・J・バンプーチンといつ。ロシアから來た。3年D組にいる。よろしく」

「ういーす」

「お前ら、ジョン以外無関心だな。ほら何か質問がある人」「ジョンに質問します。もしかして、君のお父さん、シユルツ・アクゼル？」

「何故父を知っている。父はマイナーなほうだと思ったが」

「俺の父親が大ファンでな。家に大量のビデオがある」

「これはうれしい。俺の父が好きな生徒がいたなんて。おい、名前なんだ？」

「吉田茂だけど、みんなにはシゲって呼ばれている」

「よし、シゲ。二週間だけだがよろしくな」

「おう

「他に質問は無さそうだな。よし、理事長の配下。ひとつと校長室に戻れ。これから授業だからな」

「なにその態度。お前給料減棒にすんぞ」

「理事長に言おうかな」

「嘘嘘だつて、何立場上なのに脅されるなんて不公平だーい」
泣きながら理事長の配下は教室から出て行つた。留学生はあきれてみていたが、2年B組の面々は存在事態忘れて授業を受けてようと準備をした。

そして、ジョンだけ残り、授業をした。学校が終わり、みんな帰つて行つた。ちょうど四時になると理事長室である会議をしていた。影に隠れてほとんど顔が分からぬ、ただ何故か集まつていた。

「盗聴はしておらんな」

理事長が机の上で手を組みながら座つていた。周りには十八人ほどの人がいた。

「大丈夫ですよ。さつき調べたらなかつたので」

「うむ、今回集まつたのは他でもないあの体験入学生のことじゃ」

「さつさと殺せば良いのに」

女の声がする。

「そもそもいかん。普通の体験入学生とはちよつと違つ。どう思つ、生徒会長殿」

「うん、確かに怪しいが、そう我々が思つてゐるだけかもしけないよ。君の意見が聞きたいなH・B・」

眼鏡がキラリと光るが、それでも顔はわからない」

「H・B・なら信憑性があつていいんじゃないの」

さつきとは違つた女の声がする。H・B・と呼ばれた者は声を出す。

「そうだな。」この総連第一高校に入学した只の留学生だといつ判断をするのはおかしい。まず、俺たち、裏を調べにきたのが妥当だな。あとはのんばあの家を調べに来たのかかもしれない。もしそれが本當なら、あいつらは『あの方たち』の居場所を調べよつとしているのかもしねりい」

「それだけは避けねばなるまい。しかし何故我々を今更調べよつと思うのか」

「さあな。CIA、FBI あるいは他の国にとつて邪魔な組織だからじやないか」

「でも外れていたらどうすんのよ」

「たぶんないな。」この学校の位置わかるだろ。観光名所もない、とくに所でもない。あるのは石原財団の縄張りといつことだけだ。第一高校は縄張りの外だからな」

「H・B・すまんが、彼らのことを調べてくれないか。死体は隠田君に頼めばいいだろ」

「わかりました」

教室で見るような情けない感じが全くしない。彼からでるのは殺氣だけだつた。

「では、頼むぞ皆の衆。期限は一週間。それ以上経つてしまふと今度は例の会議があるのでな、頼むぞ」

「は」

ザンッと音が鳴つて皆消えてしまつた。

そして会議はお開きとなつた。

謎の体験入学生（後書き）

体育の先生（一年） 一つ名 ムキムキマッチョ
保険の先生 一つ名 魅惑もクソもないおばさん
用務員のおじさん 一つ名 影の支配者
化学の先生（一年） 一つ名 白衣のムツシリ
社会学の先生（三年） 一つ名 夢も希望もない先生
数学の先生（一年） 一つ名 出来損ないのホムンクルス

ありえない戦い（前書き）

世の中には色々な武術が存在します。しかし、その武術をいつ使うのかがわかりません。喧嘩の時、夫婦喧嘩の時、殺しの時、さっぱりわかりません。でも今は銃を使ってるから物騒ではありますかね。

ありえない戦い

ガキイイイイイイ

「何だ。今の音は」

「リー 確認しろ」

ドック、ダッシュ、ダッ

「おい、構える。こいつら一般じやねえ」

シユツ・パ

「なんだ、こいつ狐の面なんか被りやがって」

「我狐家に伝わる拳法を見せてやるつ。『狐拳』」

「『狐拳』だと……！」

狐の面を被つた者は手を狐のよつに丸め、男たちが構えていた銃を切り崩す。弾丸をもはじき返す。

「漫画よりもすげえよ。だが、そんなふざけた拳法じゃあ、俺の蠍拳には敵わな・・・イツブシ」

そう言つた男が吹つ飛んだ。いつのまにか鬼の面を被つた奴がその男を吹つ飛ばしていた。

「鬼頭め、邪魔するな」

「ふん、狐はさつさと狸と化かし合ひでもしてな」

「呼んだか」

「すつこんでろ狸め。ここは我ら狐の戦い、貴様らのよつな奴らにここを開け放してなるものか」

「よーし、そこまで言つなら。誰が裏の中で一番決めようが。初代と一代目様の決定なんてふざけた奴だからの」

「『鬼拳』」

「『狐拳』」

「『狸脚』」

そこにはゲーム『ちょっとともない暴れ馬、三国夢想の戦い』に出
てきたキャラクター並みの衝撃波があたり一面に広がった。負傷し
た男たちはこの戦いを見ながら呟いた。

「兄貴、ずらかりましょ」

「ああ、そうだな」

「こんな結末ないよ、狸責任とりなさい」

「あなたが悪いのでしきう、狐」

「どちらも悪いんだよ、狸と狐」

「・・・・お前ら、報酬なしな」

「勘弁して下さい、HB様-----」

ありえない戦い（後書き）

家庭科の先生 二つ名 ゲロ吐き
水泳のコーチ 二つ名 力ナヅチ
陸上のコーチ 二つ名 鈍足
学校に住む犬 二つ名 野良犬
3年B組の先生 二つ名 銅ハ先生
生徒会長 二つ名 悪夢を生む化け物（茂が勝手に付けた名前）

登場人物（前書き）

ネタバレがあるので、知りたくない方はぜひ続きを読まないで結構です。

登場人物

吉田茂
よしだ しげる

血液型：A B型

星座：獅子座

好きな物：バナナクレープ

二つ名：学校の恥さらし

概要

学校創立以来屈指の悪魔。総連高校がここまで落ちたのも大半こいつのせい。生徒を煽り、教師に楯突くという教師にとつては天敵のよつな人物。出生が訳ありで今はのんばあの家に住む。

隠田平寺
おんだ ひらじ

血液型：A型

星座：牡牛座

好きな物：激辛チャーハン

二つ名：影師

概要

学校創立以来屈指の影師。彼が作る影は生きているかのように動く。マイナーな特技なため、2年B組は気にしない。裏十八家の隠田家の一人。死体処理が得意である。戦闘音痴である。

H・B・

世界一の凄腕ハッカー。彼独自のホームページがあり、そこをクラッキングできたものには世界中の隠蔽された出来事が見れるということが言われている。ただし、三回ハッキングに失敗した場合、自分の国のあらゆる情報を自分のパソコンから横流しにされてしまう。能力者なのか宇宙人なのかは今だ不明。

登場人物（後書き）

SFとか書いたけど、SFじゃないじゃん。もう、これSFに戻せないよ。

駆け引き（前書き）

頭の悪い人といい人の見分け方。会話をよく聞きましょう。オタクとリア充の見分け方、見た目で分かれます。ボク娘とスケバンの見分け方、木刀もっているかで分かれます。痛い人と厨二病の見分け方、どっちも世間に目を逸らしています。

駆け引き

（ side H · B ）

昨日の狐家、鬼家、狸家はどうにかして欲しい。今回の体験入学生とは違う任務なのに失敗はないだろ。おかげでこちらとやら残業で死んでるけどな。

今はそれどころじゃない。ここ数年、他の国から移住者が増え続けている。しかもそれがスパイだとすぐ分かってしまう。例え老人でも気をつけなければ、足下につけ込まれる可能性だつてある。この体験入学生が本当に自己紹介の国からきたのか確かめてやる。

俺が廊下を歩いていると向こうからリリー・A・リフナーが歩ってきた。少しカマを掛けてみるか。

「グッドモーニング」

「グッドモーニング」

「今日はお早い出勤ですね」

「あら、そんなに早いかしら。もう八時過ぎよ」

「僕にとつては早いけどね。ねえ、ロンドンに住んでいるの？」

「ちょっと勘弁してよ。イギリスと聞いたらロンドンに住んでいるなんて勝手に解釈しないでくれる。あたしはダブリンに住んでいるのよ」

「残念。ところでなんで僕らの学校に来ようとしたの？」

「え、そりや、他の学校には体験入学制度がなかったからね、ここにしたの。それが何か」

「僕らの学校は体験入学生制度なんてないよ。それにあつたとしたら夏休みの後くらいに設置するけどね」

「Jの女、やはりスパイか。ダブリンはアイルランドの首都、イギリスではない。こいつは結構過激派のイギリス政府に所属しているな。しかもアイルランドを自分たちの国だと認識している。うちの学校には体験入学生制度がない。何故ならあっても無駄だと理事長が判断したからだ。この地域だけ外国人は禁止になっている。ならば体験入学生制度は外国人を受け入れてしまつ制度になってしまつからだ。」

「私が頼んだら快く引き受けてくれたわ」

『強引に』を省いているな。

「ねえ、リリーさんって何歳なの？見た目が20歳以上に見えてしまうけど」

「ちょっと、あたしは18歳よ」

18歳だと、それにしては香水の匂いがするな。この匂い・・・血の匂いがかすかにした。なるほど隠すためにつけているわけだ。

「ところで話が変わるけど、例えばリリーさんの友人が秘密を隠していたら、どうする？」

「そうね。秘密というものは隠しても結局はバレてしまう。ならば私個人の力で、私が信じる力で暴いてみせるわ」

「そうですか、それじゃあ」

俺はその場を離れた。そして角を曲がったときに急いで壁を叩き、隠し階段を開いた。この階段はある特定の人物にしか開かないように設定してある。Jの階段でもう一つの屋上へと進んだ。

さつきの言葉は We believe the power, this power can be destroyed even

rything without our beliefs.
だろうな。ちつ、厄介だ。まさか、イギリス王族過激派がいるとは。
これは他の奴らも調べないと危険だぜ。

そう思いながら、H·B·は服を着替えた。旧制服を脱ぎ捨て、
現制服を着て、髪をオールバックにしてそこから出た。

↓ side H·B· out ↓

↓ side L·I·Y↓

昨日は大変だつたわ。変なお面を被つた奴らにあたしの部下がみんなやられちやつて、他のところに所属する奴らを皆殺しにしなければならなかつたなんて。しかもシャワーも入れないなんて、日本に来たくなかったわ。良い歳こいてなんで高校生にならないといけないのよ。あの校長に色気だしたら一発で引っかかつたわ。ある意味普通の校長ね。血の匂いがしないようにキツ目の香水を掛けておいたから大丈夫だと思うけど、大丈夫かしら。

向こうから男の子が話しかけてきたわ。なかなかいい体つきしてるわね。スカウトでもしようかしら。ま、日本人だからスカウトの前に死んでるかな。

「グッドモーニング」
「グッドモーニング」

あら、日本人なのに英語がうまいこと。でもまだまだね。

「今日はお早い出勤ですね」

「あら、そんなに早いから。もう八時過ぎよ」

日本人は働くことにしか脳がないと思つたけど違うのかしら。もう八時よ、普通だつたら出勤している時間なのに。

「僕にとつては早いけどね。ねえ、ロンドンに住んでいるの?」

ロンドンだと答えるべきだけど、ここはあえてイギリスの植民地であるアイルランドの首都を言うべきかしら。日本人は勤勉だけど、イギリスのいうことを何でも聞く犬だからね。

「ちよつと勘弁してよ。イギリスと聞いたらロンドンに住んでいる
なんて勝手に解釈しないでくれる。あたしはダブリンに住んでいる
のよ」

「残念」とここでなんて僕らの学校に来る」としたの?」

この子質問が多いですね
勘が鋭いのかしら。
しかもおもしに聞きたくなし」とはなり

「え、そりや、他の学校には体験入学制度がなかつたからね、ここ二つ。三つも可い

「僕らの学校は体験入学生制度なんてないよ。それにあつたとしたら夏休みの後くらいに設置するけどね」

『僕は、どうして、おまえの手を離さないでくれたの？』

「ねえ、リリーさんって何歳なの？見た目が20歳以上に見えてしまつけど」

本日は26歳。み。

「どこで話が變るに」と
例えにソニーさんの友人が秘密を隠して
いたら、どうする?」

「そうね。秘密といつものは隠しても結局はバレてしまう。ならば
私個人の力で、私が信じる力で暴いてみせるわ」

「そうですか、それじゃあ」

彼は去つて行つたわ。もうなんのこの質問攻め。そりいえばあんな子、この学校にいたかしら。ま、いいわ。どうせ三週間したらここから消えるもの。あんまり覚えないほうがいいからね。

↓ side out

このカマの掛け合いでH・B・が彼らに攻撃を仕掛けたことは言つまでもない。

駆け引き（後書き）

昨日コンビニ行つたら「当店は十八歳以下の方にはこの商品を売る
ことができません」と言われた。ビーフジャーキー買おうとした
だけなのに?
お便り待つてます。

決闘（前書き）

今日書いたあつち向いてホイは小学校の頃やつて、怒られた記憶があります。でも楽しいから別にいいでしょう。

決闘

「よし、お前ら準備はできたか?」

「え、何の準備ですかボサボーサ（笑）」

「おい、今の誰だ、（笑）なんてふざけた名称つけたのは」

「そんなのどうでもいいじゃないですか、ボサボーサ（アホ）」

「茂、貴様か。だんだんと俺を馬鹿にしていいか」

「そんなわけないですよ（本当に馬鹿を超えて、キング・オブ・馬鹿だよな）」

「よし、てめえ、決闘だ——————」

「受けてたつ」

普段とあまり変わらない2年B組で決闘が始まる。元々はテスト準備だったが、茂がテスト準備をしてこなかつたためにこうなった。ジョンは何が起こっているかさっぱりわからない様子で隠田に語りかけた。

「なあ、決闘つて何よ」

「あっち向いてホイ～死と隣り合わせの戦闘～だけど?」

「だから何それ?」

「お互いにんげんして、勝つ方が相手に右、左、下、上のどれ

かを一つ選んで、相手を殴るのさ」

「え?俺もやりてえな、ようほじんげんで勝てば相手を吹っ飛ば

せるというわけだろ」

「ま、そうだけど。茂には勝てないよ」

「なんでだ」

「見てれば分かる」

「「じょんけん——ぽん」」

ボサボーサはチョキを出し、茂はグーをだしていた。そのままアッパーを決めて、ボサボーサは上に吹っ飛ぶ。漫画「明後日のジョイ」のよつこ口から血を吐いて、

「やるな。ジョーイ」

「そうでもないさ。グレイ」

といつ風に会話しているが、ボサボーサは一回も勝てない。十回ずつと茂が勝利している。

「どうなつてんだ、これ。まさか先生つてじやんけんに弱いのか」ジョンが不思議に思つて質問した。

「まさか、違うよ。よーく見て、茂の動き」

「ん? あれは」

ボサボーサと茂が拳を出すとき、微妙に茂の方が遅いのである。

「後だしか?」

「そう。他の人にはバレない高等技術。ふ、僕も真似しようと思つたけどできなかつたよ」

「すげー卑怯だな茂つて」

「今更気付いたの?」

「今更だな」

そしてボサボーサは倒れて茂はキング・オブ・卑怯になつた。

決闘（後書き）

今回、話の流れにまつたく関係ない話をいれましたが、どうでしょうか。

二つ名が厨二病臭い？ないない、そんなわけない。そんなわけないでしょ。アハハハハ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437m/>

H.B.

2010年12月11日14時20分発行